

家族イメージ法の分析指標の検討

— 肯定的家族観・父子関係・母子関係・両親関係との関連 —

前出朋美・島谷まき子

Five Variables of Family Image Test

— Their correlation with positive family image, father-child relationship, mother-child relationship, and father-mother relationship —

Tomomi MAEDE and Makiko SHIMATANI

The purpose of this study was to examine the correlation of five variables of Family Image Test (power image, force of bond, direction of the seals, distance of the seals, and vertical presentation of the seals) with the scales of family relationship (positive family image, father-child relationship, mother-child relationship, and father-mother relationship). The results were as follows. Only the female father's power image correlated with the scales of each family relationship. Also, force of bond correlated with all of them. On direction of the seals, father-child and father-mother facing each other correlated with the scales of father-child relationship and positive family image. But distance of the seals and vertical presentation of the seals did not correlate with the scales of family relationship.

Key words: Family Image Test (家族イメージ法), five variables (5つの分析指標), the correlation of five variables with the scales of family relationship (分析指標と家族関係尺度の関連)

1. 問題と目的

家族イメージ法 (Family Image Test; FIT) とは、秋丸・亀口 (1988) が Kvebaek, D. (1980) の Family Sculpture Technique を独自にアレンジして開発した家族心理査定法である (亀口 2003)。B4判の FIT 用紙の一辺15cmの正方形の枠内に、家族成員に見立てた円形のシールを配置することで、被検者がイメージする家族像を作成する。円形シールは、直径1.6cmで白から黒の5段階に色分けされ各家族成員のパワーの強さを表し、円形シール内の▲ (鼻) 印によって各家族成員の向きを表す。各シールの間を3段階の線で結び、各家族成員間の結びつ

きの強さを表す。

家族イメージ法は、数量化しやすいため客観的なデータとして分析されている (中野・亀口 1992, 大下・亀口 1999など) が、分析指標が統一されていないために、各研究を比較できないという問題がある (柴崎・丹野・亀口 2001)。そのため、柴崎・丹野・亀口 (2001) は、大学生を対象に家族イメージ法を実施し、各家族イメージ図の父、母、大学生に着目して分析指標の研究を行った。その結果、①シールの濃さ、②シールの結びつきの強さ、③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さ、⑥父母の配置、⑦世代境界の分析指標の再検査信頼性が確認された。また、柴崎 (2000) は、大学生とその保護

者を対象に家族イメージ法と FACES III (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale III) を実施し、各家族イメージ図の父、母、大学生 (子) に着目し、上述の家族イメージ法の分析指標と FACES III との関連を検討した。その結果、父と子のシールの濃さ、父の向きと子の向き、父母、父子、母子全ての結びつきにおいて、家族全体の凝集性ならびに柔軟性との相関がみられた。一方、父母、父子、母子の距離との相関はみられなかった (亀口 2003)。しかし、これは家族イメージ法と家族全体の凝集性ならびに柔軟性との関連をみており、父子、母子、両親の二者関係との関連については検討していない。また、家族イメージ法と他の家族関係尺度との関連を検討した研究はほとんどみられない。

そこで、本研究では、柴崎・丹野・亀口 (2001) を参考に、家族イメージ法の①シールの濃さ、②シールの結びつきの強さ、③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さの 5 つの分析指標の検討を行うことを目的とする。具体的には、大学生が作成した家族イメージ図の父、母、子の三者に着目し、5 つの分析指標と、家族関係尺度 (肯定的家族観尺度、父子関係尺度、母子関係尺度、両親関係尺度) との関連を検討する。

2. 方 法

(1) 対象者と手続き

大学生男女 165 名 (男子 81 名、女子 84 名) を対象に、家族イメージ法と質問紙調査 (4 つの家族関係尺度) を実施した。そのうち有効回答数は、159 名 (男子 78 名、女子 81 名、平均年齢 19.8 歳) であった。調査は、大学生に調査用紙一式が入っている封筒を配布し、個別に実施した。

(2) 調査内容

調査は、1) 家族イメージ法、2) 質問紙 (家族関係尺度) から構成されている。

1) 家族イメージ法の分析指標

柴崎ら (2001) を参考に、父、母、大学生 (以下、子と表記) の①シールの濃さ、②シールの結びつきの強さ、③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さの 5 つの指標を分析した。①シールの濃さ

は、家族成員の発言力、影響力などのパワーの強さを 5 段階の色で表す。最も濃い色 (黒) から白の順に 5 点～1 点に得点化した。②シールの結びつきの強さは、家族成員間の結びつきを 3 段階の線で表す。強い結びつきがある太線から順に 3 点～1 点に得点化した。③シールの向きは、その向きが家族イメージ図の内側に向いているが特定の家族成員を向いていないものを「中心」、特定の家族成員を向いているものは、それぞれ「父・母・子」とし、二者間の向きの組み合わせにより、「向き合う」と「向き合わない」に分類した。「向き合う」は、二者の両方が「中心」を向いているか、片方が「中心」で他方が相手を向いている場合であり、「向き合わない」はそれ以外の場合である。④シール間の距離は、家族成員の各二者のシール間の最短距離を 0.1cm 単位で測定した。⑤シールの高さは、各家族成員を回答枠に配置した位置によって、上・中・下に分類した。

2) 質問紙 (家族関係尺度)

家族関係尺度の質問紙は、肯定的家族観尺度、父子関係尺度、母子関係尺度、両親関係尺度から構成されている。肯定的家族観尺度は、茂木 (1996) が大学生の観点から原家族のシステム特性について作成した 30 項目を用いた。父子関係尺度と母子関係尺度は、飛田・狩谷 (1992) が作成した 15 項目を用いた。両親関係尺度は、飛田・狩谷 (1992) が作成した尺度のうち、「父親の母親に対する好意」尺度と「母親の父親に対する好意」尺度の 12 項目のみを用いた。以上の 4 尺度はいずれも 5 件法 (どちらともいえないを 3 点とする 1 点～5 点) で回答を求めた。得点が高いほど、各関係を良好に認知していることを示す。

3. 結果と考察

(1) 家族関係尺度 (肯定的家族観、父子関係、母子関係、両親関係の各尺度)

1) 各尺度の基本統計量

各尺度の平均値と標準偏差ならびに男女ごとの平均値を表 1 に示す。男女ともに中間値の 3 より高く、各関係をほぼ良好に認知している。男女の平均値の差を検討するために t 検定を行った (表 1)。その

結果、母子関係尺度において女子は男子よりも有意に高かった ($t(157) = -3.05, p < .01$)。つまり、女子の方が母子関係を良好に認知していた。他の尺度では性差はみられなかった (以下, $*p < 0.05$, $**p < 0.01$, $***p < 0.001$)。

表1. 各尺度の平均値 (標準偏差) と男女ごとの平均値 (標準偏差)

	全体		男子		女子		t 値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
肯定的家族観	3.39	(.71)	3.38	(.68)	3.40	(.74)	0.25
父子関係	3.46	(.73)	3.51	(.68)	3.42	(.78)	0.71
母子関係	3.91	(.76)	3.73	(.74)	4.09	(.75)	3.05**
両親関係	3.90	(.86)	3.96	(.85)	3.84	(.86)	0.83

2) 各尺度間の関連

各尺度間の関連をみるために、ピアソンの相関係数を求めた (表2)。全ての尺度間において有意な正の相関がみられた。

表2. 各尺度間の相関係数

	肯定的家族観	父子関係	母子関係	両親関係
肯定的家族観	1	.67***	.61***	.56***
父子関係		1	.43***	.54***
母子関係			1	.33***
両親関係				1

(2) シールの濃さ、およびシールの濃さと各尺度の関連

1) シールの濃さの基本統計量

父、母、子のシールの濃さの平均値と標準偏差ならびに男女ごとの平均値を表3に示す。3 (父、母、子) × 2 (性別) の二要因の分散分析を行った結果、家族成員の主効果があった ($F(2,314) = 39.55, p < .001$) (表4)。

Tukey 法による多重比較の結果、父と母のシールの濃さの間に有意差はなかったが、父と子のシールの濃さ、母と子のシールの濃さの間に5%水準で有意差があった。つまり、子は男女とも、父と母のパワーは同程度であり、自分よりも強いと認知している。

表3. シールの濃さの平均値 (標準偏差) と男女ごとの平均値 (標準偏差)

	全 体	男 子	女 子
父	4.14 (1.08)	4.14 (1.07)	4.15 (1.09)
母	3.97 (0.90)	3.87 (0.905)	4.07 (0.84)
子	3.21 (1.07)	3.17 (1.16)	3.25 (0.98)

表4. シールの濃さの分散分析表

要 因	SS	df	MS	F
性別	1.11	1	1.11	0.96
個人差	181.22	157	1.15	
シールの濃さ	79.26	2	39.63	39.55***
シールの濃さ × 性別	0.77	2	0.39	0.39
誤差	314.62	314	1.00	
全体	576.98	476		

2) シールの濃さと各尺度の関連

シールの濃さと各尺度の関連をみるために、ピアソンの相関係数を算出した(表5)。その結果、男子は、シールの濃さと全ての各尺度の間に相関が

みられなかった。一方、女子は父の濃さと全ての尺度との間、子の濃さと肯定的家族観尺度との間に正の相関がみられた。

表5. シールの濃さと各尺度間の相関係数

		父の濃さ	母の濃さ	子の濃さ
全体	肯定的家族観	.29***	.13	.17*
	父子関係	.28***	-.04	.04
	母子関係	.15	-.04	.17*
	両親関係	.27***	.14	.04
男子	肯定的家族観	.14	.10	.10
	父子関係	.18	-.10	-.02
	母子関係	-.02	-.11	.14
	両親関係	.05	.12	-.00
女子	肯定的家族観	.42***	.16	.24*
	父子関係	.37**	.02	.11
	母子関係	.31**	-.04	.21
	両親関係	.48***	.18	.10

以上の結果より、子は男女とも、父と母のパワーは同程度であり自分よりも強いと認知していた。シールの濃さと各尺度の関連は、男子では全くみられず、女子では父の濃さと全ての尺度間、子の濃さと肯定的家族観尺度間において正の相関がみられた。柴崎(2000)では、父と子のシールの濃さにおいてFACES IIIとの相関がみられている。本研究では、女子においてのみ、父の濃さと全ての尺度間に相関がみられた。つまり、女子では、父親のパワーを強いと認知するほど各家族関係を良好に認知しており、父娘関係の特異性が示唆された。↗

(3) シールの結びつきの強さ、およびシールの結びつきの強さと各尺度の関連

1) シールの結びつきの強さの基本統計量

父子、母子、両親のシールの結びつきの強さの平均値と標準偏差ならびに男女ごとの平均値を表6に示す。3(父子、母子、両親の結びつき)×2(性別)の二要因の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった($F(2,314)=10.13, p<.01$)(表7)。Tukey法による多重比較の結果、男女とも父子の結びつきは両親の結びつきよりも有意に弱かった。父子の結びつきに性差はなかったが、母子の結びつ

表6. 結びつきの強さの平均値(標準偏差)と男女ごとの平均値(標準偏差)

	全体	男子	女子
父子の結びつき	2.16 (.16)	2.22 (.59)	2.11 (.63)
母子の結びつき	2.50 (.61)	2.33 (.61)	2.67 (.57)
両親の結びつき	2.58 (.57)	2.63 (.56)	2.53 (.59)

表7. 結びつきの強さの分散分析表

要因	SS	df	MS	F
性別	0.06	1	0.06	0.11
個人差	88.18	157	0.56	
結びつき	15.46	2	7.73	27.18***
結びつき×性別	5.76	2	2.88	10.13***
誤差	89.31	314	0.28	
全体	198.77	476		

きは女子の方が有意に強かった。男子は、父子と母子の結びつきが同程度で、両親の結びつきが有意に強かった。女子は、父子よりも母子の結びつきが有意に強く、母子と両親の結びつきは同程度であった。

2) シールの結びつきの強さと各尺度の関連

シールの結びつきの強さと各尺度の関連をみるために、ピアソンの相関係数を算出した(表8)。その結果、父子、母子、両親の結びつきの強さと各尺度間に正の相関がみられた。特に、父子関係と父

子の結びつき、母子関係と母子の結びつき、両親関係と両親の結びつきの相関が強く、その傾向は男子よりも女子の方が顕著であった。また、男子では、両親の結びつきと父子関係、母子関係の間と、父子と母子の結びつきと両親関係の間に相関がなかったが、女子では正の相関があった。つまり、男子は両親関係と親子関係の関連がみられないのに対し、女子は、両親関係と親子関係に関連がみられた。

表8. シールの結びつきの強さと各尺度の相関係数

		父子の結びつき	母子の結びつき	両親の結びつき
全体	肯定的家族観	.42***	.40***	.40***
	父子関係	.68***	.28***	.22**
	母子関係	.21**	.67***	.22**
	両親関係	.27**	.19*	.58***
男子	肯定的家族観	.38***	.38***	.31**
	父子関係	.59***	.36**	.10
	母子関係	.29**	.57***	.15
	両親関係	.15	.16	.46***
女子	肯定的家族観	.46***	.43***	.48***
	父子関係	.76***	.26*	.30**
	母子関係	.19	.73***	.35**
	両親関係	.36**	.28*	.68***

以上の結果より、子は男女とも父子の結びつきよりも両親の結びつきを強く認知している。男子は父子の結びつきと母子の結びつきを同程度に認知しているが、女子は母子の結びつきの方を強く認知している。シールの結びつきの強さと全ての各尺度間に関連がみられたことから、シールの結びつきの強さは、家族の各関係の良好さを表していることが認められた。これは、柴崎(2000)の結果と符合している。一方、本研究では、結びつきの強さと各尺度の関連に一部性差がみられた。ノ

(4) シールの向き、およびシールの向きと各尺度の関連

1) シールの向きの基本統計量

父子、母子、両親のシールの向きの度数分布を表9に示す。また、男女に偏りがあるかを検討するために χ^2 検定を行った結果、母子の向きにおいてのみ、有意な偏りがあった($\chi^2(1)=8.02$, $p<.01$)。つまり、両親と父子の向きは、男女に偏りはなかったが、母子の向きは、女子の方が男子よりも向き合っていた。したがって、母-娘関係は母-息子関係よりも向き合っていると言える。

表9. 父子、母子、両親のシールの向きの度数分布(パーセント)

		全体	男子	女子	
父子	向き合う	50(31.4)	28(35.9)	22(27.2)	$\chi^2(1)=1.40$ $p=0.23$
	向き合わない	109(68.9)	50(64.1)	59(72.8)	
母子	向き合う	69(43.4)	25(32.1)	44(54.3)	$\chi^2(1)=8.02$ $p=0.005**$
	向き合わない	90(56.6)	53(67.9)	37(45.7)	
両親	向き合う	88(55.3)	43(55.1)	45(55.6)	$\chi^2(1)=0.00$ $p=0.95$
	向き合わない	71(44.7)	35(44.9)	36(44.4)	

2) シールの向きと各尺度の関連

シールの向きと各尺度の関連をみるために、シールの向きにおける各尺度の平均値を求め(表10)、各尺度ごとに「向き合う」と「向き合わない」の平均値のt検定を行った。父子の向きでは、肯定的家族観と父子関係において有意差があった($t(157)=3.33, p<.001, t(157)=3.18, p<.01$)。つまり、父子が「向き合う」方が、肯定的家族観と父子関係を良好に認知していた。母子関係、両親関係では

有意差はなかった。母子の向きでは、「向き合う」方が両親関係を有意に低く認知していた($t(157)=-2.06, p<.05$)。他の尺度では有意差はなかった。両親の向きでは、肯定的家族観、父子関係、両親関係において有意差があった($t(157)=4.25, p<.001, t(157)=3.84, p<.001, t(132)=3.41, p<.01$)。つまり、両親が「向き合う」方が肯定的家族観、父子関係、両親関係を良好に認知していた。母子関係では有意差はなかった。

表10. 父子, 母子, 両親の向きにおける各尺度の平均値(標準偏差)

	父子の向き		母子の向き		両親の向き	
	合う	合わない	合う	合わない	合う	合わない
肯定的家族観	3.66(.61)	3.27(.72)	3.42(.70)	3.37(.72)	3.68(.63)	3.13(.73)
父子関係	3.73(.69)	3.34(.72)	3.43(.79)	3.49(.69)	3.66(.65)	3.22(.76)
母子関係	4.00(.66)	3.87(.81)	4.04(.67)	3.82(.82)	3.97(.77)	3.84(.76)
両親関係	3.95(.80)	3.88(.88)	3.74(.86)	4.02(.83)	4.10(.74)	3.64(.93)

以上の結果より、シールの向きの指標では、母娘は母-息子よりも向き合っており、シールの結びつきの指標でみられた母子の結びつきの強さと合致している。また、シールの父子の向きと両親の向きが「向き合う」方が、父子関係を良好に、家族を肯定的に認知している。しかし、シールの母子の向きは「向き合わない」方が両親関係をより良好に認知している。一方、家族イメージ法の感想欄に、シールの向きに関するものが多く記述されていた。例えば、「向きを決めにくい」「向きは、誰か一人ではなく家族全員を見ている」というものである。これらの記述から、シールの向きの指標には多義的な意味が含まれていると考えられるため、各尺度との関

連について一義的に捉えることは難しいと言えよう。

(5) シール間の距離, およびシール間の距離と各尺度の関連

1) シール間の距離の基本統計量

父子, 母子, 両親のシール間の距離の平均値と標準偏差ならびに男女ごとの平均値を表11に示す。3(父子, 母子, 両親間の距離)×2(性別)の二要因の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった($F(2,314)=5.56, p<.001$) (表12)。Tukey法による多重比較の結果、父子の距離よりも両親の距離が有意に近かった。つまり、男女とも自分と父親の距離よりも両親間の距離を近く認知していた。

表11. シール間の距離の平均値(標準偏差)と男女ごとの平均値(標準偏差)

	全体	男子	女子
父子の距離	5.12 (2.59)	4.90 (2.26)	5.43 (2.86)
母子の距離	4.60 (2.42)	5.04 (2.39)	4.17 (2.38)
両親の距離	4.09 (2.53)	4.22 (2.68)	3.97 (2.38)

表12. シール間の距離の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
性別	0.07	1	0.07	1.98
個人差	5.39	157	0.03	
距離	17.53	2	8.77	9.95***
距離×性別	9.79	2	4.89	5.56**
誤差	276.57	314	0.88	
全体	309.35	476		

2) シール間の距離と各尺度の関連

父子、母子、両親のシール間の距離と各尺度との間には、ほとんど関連がみられなかった（結果は省略）。

以上の結果から、シール間の距離の指標では、男女とも父子の距離よりも両親の距離を近く認知しており、シールの結びつきの指標でみられた、男女とも父子の結びつきより両親の結びつきを強く認知する結果と合致する。また、シール間の距離と各尺度との間には関連はみられなかった。これは、柴崎（2000）の、父子、母子、両親の距離と FACES III との間に関連がみられなかった結果と符合する。しかし、柴崎（2000）でも本研究でも、シール間の距離の指標を二者間のシールの距離の実測値としてのみ捉えたために、関連はみられないという結果になったとも考えられる。シール間の距離の指標をど

のように捉えるかという問題がある。

(6) シールの高さ、およびシールの高さとは各尺度の関連

1) シールの高さの基本統計量

父、母、子のシールの高さの度数分布を表13に示す。男女の人数の偏りをみるために χ^2 検定を行った。その結果、父の高さ、母の高さ、子の高さにおいて、男女の人数の有意な偏りはなかった ($\chi^2(2) = .27, p < .87, \chi^2(2) = 2.53, p < .28, \chi^2(2) = 2.58, p < .27$)。次に、父、母、子の高さの間の人数の偏りをみるために χ^2 検定を行った結果、有意な偏りが認められた ($\chi^2(4) = 55.60, p < .000$)。つまり、父は上に、母は上と真中に、子は真中に配置される傾向がみられた。

表13. 父、母、子の高さの度数分布（パーセント）

父の高さ	上	真中	下	合計
男子	51(65.4)	22(28.2)	5(6.4)	78(100)
女子	56(69.1)	20(24.7)	5(6.2)	81(100)
全体	107(67.3)	42(26.4)	10(6.3)	159(100)
母の高さ	上	真中	下	合計
男子	36(46.2)	30(38.5)	12(15.4)	78(100)
女子	40(49.4)	35(43.2)	6(7.4)	81(100)
全体	76(47.8)	65(40.9)	18(11.3)	159(100)
子の高さ	上	真中	下	合計
男子	24(30.8)	46(59.0)	8(10.3)	78(100)
女子	17(21.0)	51(63.0)	13(16.0)	81(100)
全体	41(25.8)	97(61.0)	21(13.2)	159(100)

2) シールの高さとは各尺度の関連

父、母、子のシールの高さとは各尺度の間には、ほとんど関連がみられなかった（結果は省略）。

以上の結果より、シールの高さの指標では、父は上に、母は上と真中に、子は真中に配置される傾向がみられた。シールの高さとは各尺度の間に関連がみられなかったのは、シールの高さの指標の分析方法に問題があるためと考えられる。つまり、本研究では、父、母、子について別々に、上・真中・下に分類したため、家族イメージ図内の二者の配置関係（上下・横並び等）を捉えられなかった。↗

4. 今後の課題

本研究では、家族イメージ法の分析指標である①シールの濃さ、②シールの結びつきの強さ、③シールの向き、④シール間の距離、⑤シールの高さについて、分析指標別に検討したが、分析指標間の関連を検討することによって、家族イメージ図を総合的に捉える視点が必要であろう。シールの距離とシールの高さの指標をどのように捉えるかについても、再検討する必要がある。亀口（2003）は、シールの距離の指標を、両親の距離と親子の距離の比率が1より大きいかどうかという視点から捉え、また、シ

ールの高さに関しては、両親の配置（夫婦軸）と子の位置の関係から捉えている。また、本研究では、家族イメージ図の父、母、子のみに着目したが、祖父母やきょうだいも分析の対象とした検討が必要であろう。

参考文献

- 秋丸貴子・亀口憲治 1988 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究, 2, 1, 61-74.
- 飛田操・狩谷佳子 1992 両親の「仲の良さ」の認知と親子関係 福島大学教育学部論集, 51, 55-63.
- 亀口憲治 2003 F I T (家族イメージ法) マニュアル システム心理研究所
- 茂木千明 1996 家族の健康性に関する一研究-大学生の子どもの観点から- 家族心理学研究, 10, 1, 47-62.
- 中野まり・亀口憲治 1992 思春期の子どもとその両親の家族イメージ-臨床群と非臨床群の比較を通して- 福岡教育大学紀要, 41, 4, 283-290.
- 大下由美・亀口憲治 1999 中学2年生の家族イメージの研究-父、母、子の3者関係イメージ- 家族心理学研究, 13, 1, 1-13.
- 柴崎暁子 2000 親と子の家族機能の認知と精神病理 東京大学修士論文 未公刊
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 2001 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究, 15, 2, 141-148.

(まえで ともみ 生活機構研究科生)

(しまたに まきこ 生活機構研究科)